

## 北極海から見る世界地図

**フ**ィンランドとバルト三国は日本からは遠いEU加盟国ですが、それぞれの国と日本の間にはたった一つの国しかありません。ロシアです。そのことを再認識させられたのが、昨年秋の経済同友会のロシア・欧州ミッションでした。日本では環太平洋の国々との距離感は正常でも、環大西洋とか地中海の国々となると漠然とした遠い世界になりがちです。それは距離感だけでなく世界観の違いでもあるのでしょうか。

グローバル社会で新たに注目されてきているのが北極海から見る世界地図です。最近のロシアを巡る議論でも北極海航路が現実的な検討課題になってきました。実用化が進めば空路と同じく海上輸送でも大幅短縮となります。ロシア国営石油が欧米石油大手と組んで、北極海の石油ガス開発に乗り出す動きが出ています。ロシアの意向は資源開発の見返りに海外の権益譲渡を迫り、ガス田から市場までパイプラインでつないで事業拡大を図るエネルギー戦略の推進です。周辺諸国からもさまざまなメッセージが届くようになりました。昨年来日されたバルト三国・ラトビア外務大臣は、自国紹介でラトビアが北極海航路の良港であるとアピール。ミッションでフィンランドを訪問した際にも、極東から最短の欧州空路とともに北極海航路が話題になりました。

こうした新たな北極海の可能性を思うと北方領土に対する見方も変わります。最果ての地から現代物流の経路になり得るからです。ロシアのプーチン大統領の再登板に加えて、日本でも安倍総理が再登場。両国の新政権による関係改善が始まる機運にあります。そこで経済界からもこうした動きに連動して、北方領土を歴史的

な負の遺産としてではなく、北極海航路のインフラ整備といったプラス思考の経済・ビジネスの視点から見直すことができないかと思うようになりました。ロシア専門家による極東ロシアを見る視点は1.人口減少、2.シベリアのエネルギー資源、3.存在感を高める中国、そして4.北極海航路、だそうです。北方領土の4島返還に関しては日口間で主張が割れていますが、少なくとも領土問題として両国では認識されており、日口関係は悪くないし、ロシア人も親日的です。日本への帰属が認められれば、日本政府としても返還の時期や様態は柔軟に対応する姿勢なので、経済発展が大きな鍵になるでしょう。

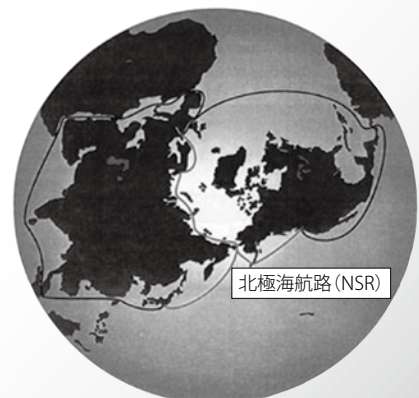
以下の観点から極東ロシアで日口両国が協力する意義は大きく、これまでロシアからのガス・パイプライン、発電網の構想や、資源開発や省エネなどでの日本からの技術協力が提案されてきました。しかし、北極海航路のような新たな世界観から考えれば、例えば、新たに両国が協働して自然災害や海難救助のための基地建設や、旧型原潜や旧式原発の総合研究管理施設を設置し、共同利用の場として活用していくといった発想も可能ではないでしょうか。経済外交の一環として経済界からもさらなる情報発信と提言を期待したい、今日この頃です。



多田 幸雄

双日総合研究所  
取締役社長

ロシア・NIS委員会 委員長



出所：海洋政策研究財団Ship & Ocean Newsletter177号より